

# 漁村の歴史アートで表現

半田・亀崎地区

## 名城大生が体験型企画

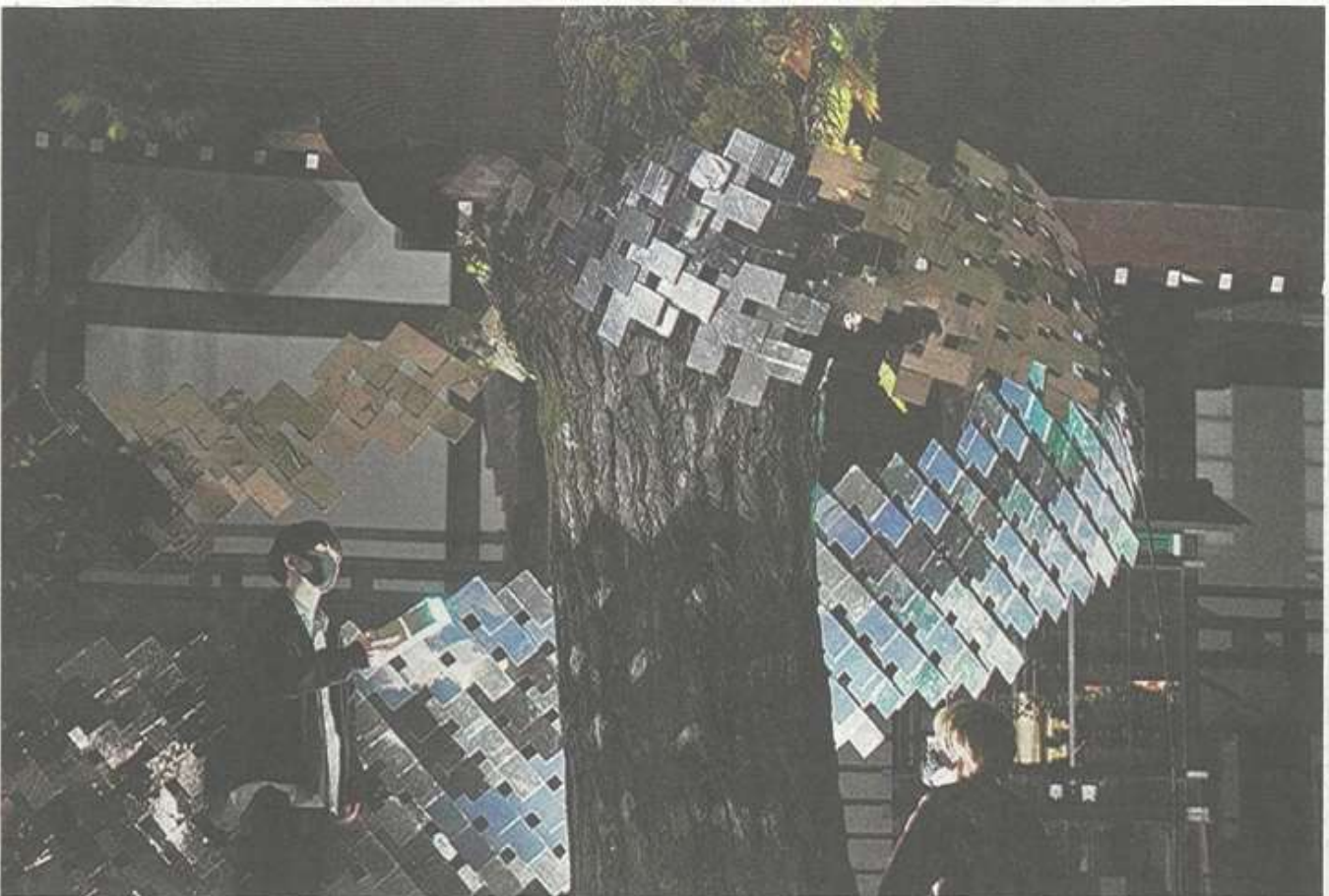
名城大建築学科（名古屋市天白区）の学生が手掛けた体験型アートの作品を楽しむイベントが三日、半田市亀崎町の浄願寺であった。境内のイチヨウの木には巻き付くように鏡が取り付けられ、訪れた人がライトを向けて輝きや反射光に見とれていた。

（三宅駿平）

作品は「煌めきを纏う」と題し、二つの鏡はアルミホイルや遮熱フィルムを貼った繊維板をつなぎ合わせて制作した。長さは十四メートル七センチ、高さ二・五メートル。ライトを当てると鏡面や反射した光が、魚のうろこや水面のきらめきに見える仕組みになっている。かつて漁業で栄えた亀崎地区の歴史をアートに落とし込んだ。

作品は生田京子教授の建築デザインゼミで学ぶ四年生八人が制作。同ゼミは毎年、亀崎地区の街並みを研究して街おこしにつなげるプロジェクトを実施しており、今年で四回目となる。

四年の清水夏海さん（三）は「地区の歴史に関心を持ち、どのような形で表現できるかを皆で考え体験型アートに行き着いた」と話した。イベントは十日午後五時半～七時半にも同所で開催する。



鏡がイチヨウの木に巻き付くよう設置され、ライトの光を反射して輝いた。半田市亀崎町の浄願寺で